

色見本配列による心理テストの試作(1)

A Study on the Personality Test using the Color Arrangement (1)

名取 和幸	Kazuyuki Natori	日本色彩研究所	Japan Color Research Institute
近江源太郎	Gentarow Ohmi	女子美術大学	Joshi University of Art and Design
江森 敏夫	Toshio Emori	日本色彩研究所	Japan Color Research Institute

キーワード：色彩好悪, パーソナリティ, 主要5因子性格検査, 不安

Keywords : color preference, personality, Big Five, anxiety

1. はじめに

好悪や連想などに基づく色選択の個人差から、パーソナリティを診断しようとするテストは幾つか作られている。中で最も完成度が高いと思われるものは、フィスターが考案した「カラーピラミッドテスト」である。しかしながら、近江ら(1997)はこのテストにおける使用色の構成及び診断法(選択色の集計分類)等の問題を指摘している。

本研究では、1) 使用色は色彩感情データを用いて体系的に設定したものとし、2) 選択色の集計分類は、色相別・トーン別、色彩感情別など、幾つかの基準から進める。そして、得られた選択色の傾向から性格をどこまで予測できるかの見通しをつけることを、研究目的とする。

2. 方法

成人男女29名(女性27名・男性2名、平均年齢42.7歳)に対し、後述の配色作成課題を集団法により行わせた。全ての被験者は、その10日ほど前に、質問紙によるパーソナリティテストを個別に実施している。

1) 配色作成課題

3層6マスのピラミッド型の図版上に(図1)、21色のカラーチップを自由に選んでマスに並べさせ、気に入った(好きな)配列と、気に入らない(嫌いな)配列を、5点ずつ作成させる。同じ色コマを多く用意し、同じ配列内、配列間で同じ色を繰り返し使うことができるようにした。また一度置いた色を取り替えることも許した。

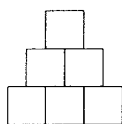


図1 提示図版

使用色は、SD法による100色の色彩感情調査データ(1998年色研実施)から、感情効果が異なるように体系的に選んだ。具体的には、色×尺度の被験者平均評定データを因子分析にかけ、色別因子得点をクラスタ分析し9クラスタを求めた。クラスタごとに色空間における分布を考慮し、図2のように21色を選定した。

作業の背景面にはライトグレー(N7)の厚紙を敷き、自然光と一般の蛍光灯とを併用した環境で2005年10月に実施した。

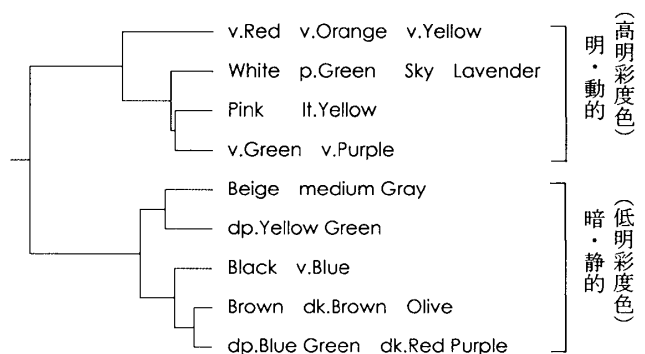


図2 色彩感情クラスタ別の使用色

2) パーソナリティテスト

村上らによる「主要5因子性格検査(Big Five)」70問に加え、曖昧な状況に対する寛容さをとらえる「曖昧さ耐性尺度:ATS」(今川1981)44問、「刺激欲求尺度・抽象表現項目版:SSS-AE」(古澤1989)15問、「特性不安尺度・日本語版(STAI)」(清水ら1981)20問を使用した。

3. 結果と考察

1) パーソナリティテスト

被験者ごとに、Big Fiveの因子別得点と他の性格尺度得点を求めた。回答者群のパーソナリティ特性の得点分布は一般日本人の傾向と同程度であることが確認された。ただし、テスト項目間の相

関係数が高く、独立ではない組み合わせがいくつか見受けられた。例えば、Big Fiveの5因子中の「情緒安定性」と「外向性」との間はかなり高い相関がみられた ($r=0.57$)。他にも「知性」は、「情緒安定性」「外向性」「勤勉性」とかなり高い相関があり (順に $r=0.60$, $r=0.55$, $r=0.50$)、また、「特性不安テスト」の結果は、Big Fiveの「情緒安定性」や「外向性」と高い相関があった (順に $r=-0.72$, $r=-0.63$,)。

2) 配色顔用色と性格との関係

配色使用色を、色相別 (暖色, 寒色, 紫系) とトーン別 (Tint+Pure, Shade+Moderate, 無彩色) に分類し、性格テストの得点との相関を求める。また色彩感情のクラスタ分析結果から、使用色を、明るく動的な印象の色群 (図2 上半分) と暗く静かな色群 (図2 下半分) とに分け、それと性格との相関を計算したり、どのような色彩感情を持つ配列を作るかということと性格との関係をみるために、使用色それぞれを、評価性, 活動性, 潜在性の因子得点に換算し、その値と性格との相関を求める。他に、21色中の総使用色の種類と、3つ以上のピラミッドで使用した色種類 (固執色数) と性格との相関も算出する。

作られた好きな配色と嫌いな配色との結果をみると、例えば、情緒安定性が高い人ほど、嫌いな配色には低明彩度色を多く使い、好きな配色には逆に低明彩度色を使わないという傾向がみられるというように、好きと嫌いでは、性格特性と顔用色との関係は、全般的には反対の関係となっていた。そこで、用いられた色とその人の性格との関係は、好きな配色における結果を中心に、相関係数がある程度強い組合せ (0.4以上を目安) を取り上げることとする。結果を表1に示す。

表1 性格特性と顔用色との相関係数

色分類基準 性格特性	色系統別 (Tone)			色彩感情のタイプ	
	Tint Pure	Shade Moderate	Neutral	明・動 (高明彩)	暗・静 (低明彩)
外向性	0.12	-0.36	0.36	0.37	-0.38
情緒安定性	0.32	-0.44	0.24	0.47	-0.48
刺激欲求(開放)	0.49	-0.35	-0.08	0.48	-0.49
特性不安	-0.11	0.41	-0.45	-0.32	0.33

$R \geq \pm 0.4$ を太字で示す

表1には記していないが、顔用色の色相と性格テスト得点との相関は全般的に低く、関係はほとんどみられない。

一方、トーンと性格、使用色のイメージと性格とについては、以下のようにいくつかの組み合わせで関係がみられる。「情緒安定性」が高いほど、低明彩度のトーンや暗く静かな印象の色を使う頻度は減少し、明るく動的な色を使う傾向が高まる。「特性不安」が高い人は低明彩度色をより使った配列を作り、無彩色は使わない。「外向性」が高い人は、低明彩度色を相対的にあまり使わない。「開放的な気持ちを求める」人は、高明彩度系の色や、明るく動的な印象の色をよく使用し、暗く静かな色は使わない。なお、総使用色の種類、固執色数と性格テストとの相関はそれほどはっきりとみられていない。

使用色の違いから、どの程度まで性格を推定できるかを探るために、顔用色との相関が高かった性格項目として「外向性」「情緒安定性」「特性不安」を取り上げ、それぞれの性向が高い上位群と下位群とで使用頻度の差が大きい色などを抜き出し、性格特性ごとに、上位回答者が使用しやすい色群、下位群が使用しやすい色群との重相関係数を求めた。結果、重相関係数は、「外向性」では0.677、「情緒安定性」で0.748、「特性不安」で0.829となった。ちなみに「特性不安」の場合、使用傾向色としてdarkトーンとbrown, beige, 不使用傾向色として白・黒と純色の赤黄青とした。

4. まとめと今後の課題

好きな配列にどのような色相の色を使用するかと性格とは関係は薄く、トーンとの関わりの方が強い。色相を中心とした分類集計を行うカラーピラミッドテストの結果の解釈には問題があるとみてよいだろう。顔用色と性格との対応は、明るく彩度の高い色を好んで使う人は、「外向性傾向」が強く、「情緒安定性」が高く、「開放的な気分を求める傾向」がみられる。暗く彩度の低い色を使う人は、「内向性」「情緒不安定性」「特性不安」が強い傾向がある。

今後の課題としては、回答者人数と集団の偏りを配慮したデータの追加収集が求められる。また、性格と顔用色傾向の相関はそれほど強くない。色ごとに性格との対応を検討する、顔用色以外の分類基準、例えば配列パターンなどを指標に加えることも考えられるであろう。